

タイトル名「対人援助実践をレポートするこの一冊」



第9回：第2章-その2-

なぜ，もう一度，企画ワークショップなのか？

—第2弾へのつながり—



著：渡辺修宏

企画：渡辺修宏

小幡知史

二階堂哲

ネットワークショップ

2020年の対人援助学会年次大会において，企画ワークショップ「対人援助実践をレポートするこの一冊」を実施させていただきました。その時の内容および詳細については，対人援助学マガジン46号～48号における「対人援助実践をレポートするこの一冊」を，御覧いただければと思います。

第3回：第1章その3（46号）

<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol46/52.pdf>

第4回：第1章その4（47号）

<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol47/57.pdf>

第5回：第1章その5（48号）

<https://www.humanservices.jp/wp/wp-content/uploads/magazine/vol48/56.pdf>

そして2021年の年次大会におきまして，これの続編となる「対人援助実践をレポートするさらなる一冊」を企画・実施いたしました（開催期間は2022年1月29日土曜日から，翌日，30日の日曜日まで）。

2021年大会の企画ワークショップに際しては，従来の渡辺修宏，小幡知史先生，二階堂哲先生の3者に加えて，神山勉先生（横浜国立大学）と長谷川（錦織）福子先生（障害児通所支援事業所樹の子クラブ）の両先生にも加わっていただきました。

両先生とも，私達がこれまでに積み重ねてきた対人援助実践，対人援助研究の節目節目で邂逅してきた，尊敬する仲間です。今般の企画ワークショップで，両先生からも良書を紹介していただこうと，お声がけをさせてもらったのでした。

なぜ再び、企画ワークショップなのか？

ところで、おそらく読者の中には、「2020年に一度やっている企画ワークショップを、なぜもう1回繰り返すのか？」と、疑問に持たられる方もいるかも知れません。そもそも、この企画に参加してくださった先生方も、そのようなしこりをお感じになったかもしれません。

そこで本稿は、再企画の必要性、その疑問(?)について(勝手に)お答えしたいと思います。

端的に述べますと、その理由とは、「1回だけでは到底、紹介しきれないほどの良書があったから」ということになります。

というのも、そもそも私、渡辺は、2020年の対人援助学会年次大会における企画ワークショップ「対人援助実践をレポートするこの一冊」において、以下の2冊、「真理の探究」と「科学するブッダ」を紹介したこととなっておりますが、実は・・・もっと文献を取り上げていたのです。ええ、延べ12冊です。

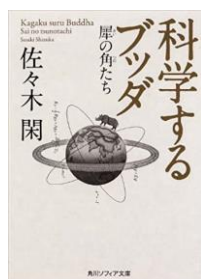
これはその日、参加してくださった方しかわからないことなのです。

プレゼンターの小幡先生から、「渡辺さん、タイトルの『この一冊』を思いっきり無視ですか?…ふつー、一冊じゃないんですか?」と、的確かつ至極ごもっともなツッコミをいただき、汗を書いたことを、今朝の出来事のように、よく、覚えております(笑)



佐々木閑, 大栗博司 (2016),

「真理の探究 仏教と宇宙物理学の対話」幻冬舎



佐々木閑 (2013),

「科学するブッダ 犀の角たち」,

KADOKAWA

私がおその日、紹介させてもらった他の文献は、ダニエル・ピンク著・勝間和代訳の「When 完璧なタイミングを科学する」、大竹文雄・平井啓著の「医療現場の行動経済学 すれ違う医者と患者」、松原泰道著の「人徳のすすめ」、小池喜明著の「葉隠 武士と奉公」、藤原正彦著の「国家の品格」、藤井聡著の「プラグマティズムの作法 閉塞感を打ち破る思考の習慣」、長谷部誠著の「心を整える 勝利をたぐりよせるための56の習慣」で

した。

それぞれについて、ほんの一言ずつですが、ご紹介させていただきました。いずれも私の心の琴線に触れる名著であったので、お読みいただければきっと多くの方々が、「なるほど、納得」、「なるほど、満足」と、お感じになられるかと思っております。



1.	ダニエル・ピンク，勝間和代訳（2018）	「When 完璧なタイミングを科学する」，講談社
2.	大竹文雄・平井啓（2018）	「医療現場の行動経済学 すれ違う医者と患者」，東洋経済新報社
3.	松原泰道（1996）	「人徳のすすめ」，佼成出版社
4.	小池喜明（1999）	「葉隠 武士と奉公」，講談社
5.	藤原正彦（2005）	「国家の品格」，新潮社
6.	藤井聡（2012）	「プラグマティズムの作法 閉塞感を打ち破る思考の習慣」，技術評論社
7.	長谷部誠（2014）	「心を整える 勝利をたぐりよせるための56の習慣」，幻冬舎

*紹介順に表記しております。

さて、それぞれの良書が、なにをどう教えてくれたのか？

少なくとも渡辺はそこから何を学んだのか？

そして渡辺はどのようにレポートできたのか、というお話もできるのですが…。実は、

文献の紹介はここで終わったわけではありませんでした。

私，渡辺は，最初の2冊に加えて上の7冊を紹介した後，あまつさえ，「コミック」にまで文献の概念を拡大させ，以下の漫画の説明にまで，手を出したのです。

そう，それは，井上雄彦の「バカボンD」，小山宙哉の「宇宙兄弟」，そして，万乗大智の「機動戦士ガンダム アグレッサー」でした。

嗚呼…，今頃，「渡辺さんは結局，何がしたかったんですか？何を言いたかったんですか？」と，どこかで誰かがエアっこみをされていますね。

そのツッコミに答えるべく，合計12冊の文献（漫画含む）の魅力については，いずれまたどこかで懇切丁寧に，そして手取り足取りお伝えさせていただくこととして…，すくなくて今は，「1回こっきりのワークショップでは，とても語りきれなかったから」という実態が，おわかりいただけたかと思います。

そう，だからこそ，企画ワークショップ第2弾，「対人援助実践をレポートするさらなる一冊」が生まれたのです。

プレゼンターを3人から5人に拡大し，またまた良書を，そしてそこから得られるレポートの源を，ぜひ皆様にお伝えしようとしたのです。

そんなわけで，第2弾では，誰がどのような文献を手にとって，どのように語ったのかについて，以降，記していきたいと思います。

—つづく—